

# 足音

九月十二日  
石巻中一年  
学年通信No.二十五  
編集・発行  
鈴木 孝明

一つの終わりと始まり

もうすぐ今日が終わる  
やり残したことはないかい  
親友と語り合ったかい  
燃えるような恋をしたかい  
一生忘れないような  
出来事に出会えたかい  
かけがえのない時間を胸に  
刻み込んだかい

「オワリはじまり」かりゆし58

先週の金曜日、石巻中学校の文化祭が終わった。一年生にとっては、初めての文化祭が終わった。

その始まりは、夏休み前にさかのぼる。実行委員、テーマの募集、テーマアートの募集もあった。夏休み中にはステージ発表のオーディションもあった。

夏休み明け、各種実行委員の準備、リハーサル。実に多くの時間をかけ、その日にたどりついた。一つの行事を作り上げるためにどれほどの手間がかかっているか、実感した人も多かったことだろう。

美術部作成の看板も、夏休みを使って仕上げ

たものだろう。一枚の中に文化祭の要素を詰め込んだ素晴らしい作品だった。

スタートの吹奏楽部演奏。発表の形式は収録。これまでの練習でも数多くの制限の中でやってきたことだろう。そんな中でも見事に文化祭のスターターを務めあげた。

学年の総合発表。発表自体はクラス、そして学年、と繰り返してきたけれど、代表の二グループが一つの発表として行うのはこれが初めて。前日のリハーサル後、始まりやグループの入れ替え、最後のあいさつなどを一念に打ち合わせている姿には、学年の代表としての責任感があった。本番は、本当に立派に、そしてとてもスマートな発表に仕上がっていた。流石だ。

先輩方の発表からは、一年後、二年後の自分たちの姿を見たことだろう。

文化祭のメインイベントとも言えるステージ発表。一年生から参加者がいた。実



に見事なダンスだった。いつもと違う仲間の姿に、驚いた人も多くいたことだろう。

その舞台を際立たせるために、実行委員として多くの人たちが関わっていた。一年生の中にもステージ司会に裏方にと、様々なところで舞台を支えていた。

ステージでは、さらにダンスにピアノ、劇やお笑いなど多種多様な演目が並んでいた。その中で先輩方の力のすごさを感じたころだろう。始まりから終わりまでも劇で貫き通した生徒会役員の力にも驚いたことだろう。

今度は見る側ではなく、やる側で文化祭に関わってみたい。そう思った人も多くいたことだろう。

フィナーレは全校を巻き込んだドラゴンボール探し。テーマの「つなごう僕らの物語」を見事に体現したものだ。

こうして、文化祭は終わった。そして、一つの終わりは、次の始まり。そうして日々は繋がっていく。舞台で輝くテーマアートののごとく。次に始まっていくもの。目の前を見れば、いくらでもある。その一つ一つが、かけがえのない時間となることを願う。

